Tohto University

A survey on the basic knowledge of nursing college students' HIV/AIDS

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-09-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西田, 陽子, 武政, 奈保子, 菅沼, 澄江, 久米, 美代子, Nishida, Yoko, Takemasa, Nahoko, Suganuma, Sumie, Kume, Miyoko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.50818/00000083

©東都大学2011

東都医療大学紀要
第1巻　第1号

研究報告

看護系大学生のHIV・AIDSに関する基礎的知識の調査

A survey on the basic knowledge of nursing college students' HIV/AIDS

西田陽子[1)]　武政奈保子[1)]　菅沼澄江[1)]　久米美代子[2)]
Yoko Nishida, Nahoko Takemasa, Sumie Suganuma, Miyoko Kume

要　旨

日本では、HIV 感染者・AIDS患者ともに増加の状況が続いており、HIVやAIDSに対する知識の普及・啓発活動が行われている。世相の反映を受けて昨年の看護師国家試験には、HIVやAIDSに関する問題が出題されており、看護職者にHIVの感染経路やAIDS発症の診断、抗HIV薬に関する知識、HIV陽性者の性交渉に関する知識が求められてきている。

本研究は、看護系大学の学生のHIV・AIDSに関する基礎的知識の実態について学年進行による知識の程度の相違を調査した。その結果、専門知識は2年生が1年生よりも知識が深まっていた。特に、①「AIDS発症」、②「HIV感染経路」、③「HIV陽性者の福祉サービス・HIV陽性者の性交渉」に関して、1年生より2年生の正解率が高かった。その一方で、④「看護師の役割」については1、2年生とも正解率が低いものもあった。今後、知識のみならず、看護師の役割も強化できる教育の構築が重要である。

[キーワード]
性感染症　看護大学生　リプロダクティブヘルス　母性看護学　基礎看護学

I. 緒　言

AIDS（後天性免疫不全症候群：acquired immunodeficiency syndrome）は、1981年アメリカ合衆国で最初の症例が報告されて以来、既に20年以上たち、その広がりは世界的に深刻な状況にある。1990年代半ばには急速に患者数が増加した[1)]。2007年末までに2,500万人がHIV（ヒト免疫不全ウイルス：human immunodeficiency virus）関連疾患で亡くなり、3,300万人がHIVに感染していると推測されている。日本でも、1985年に初めてAIDS患者が報告され、国民の新たな問題として注目されてきた。2008年末[2)]までにHIV感染者10,552件、AIDS患者4,899件、合わせて15,451件の報告がされ、2008年の新規報告数は、HIV感染者が1,126 件、AIDS患者431件、合わせて1,557件で、HIV 感染者・AIDS患者ともに増加の状況が続いている[2)]。なかでも、2005年には、15歳から24歳の若年層が感染者総数全体の約35%を超えた[2)]。我が国においてもHIVやAIDSに対する知識の普及・啓発活動が行われており、エイズに苦しむ人々への理解と支援の意思を示すために“赤いリボン”をシンボルにした運動なども行われている。

昨年の看護師国家試験には、HIVやAIDSに関する問題が出題されており、世相を反映して看護職者にHIVの感染経路やAIDS発症の診断、抗HIV薬に関する知識、HIV陽性者の性交渉に関する知識が求められていることは明らかである。看護系大学の学生の場合、看護教育を受け学年進行に伴いHIVやAIDSに関する正しい知識が養われていくことが期待される。しかし、HIVやAIDSについては誤った知識をもって大学に入学してきていることも考えられ、看護教育ではそれらの間違いを正し、看護と結びつけて知識や態度を教育していかなければならない。そこで、看護系大学の学生にHIV・AIDSに関する知識や態度を問う自記筆調査を医学系の授業を受けていない1年生と受けている2年生に対して行い両者を比較検討した。基礎的知識の実態を分析した上で看護系大学生へのHIV・AIDSに関する教育に向けて、今後の指導に繋げたいと考える。

1）東都医療大学　2）東京女子医科大学

Ⅱ．研究目的

看護系大学の学生のHIV・AIDSに関する基礎的知識・態度の実態と学年進行での知識の程度の相違を分析し、今後の看護系大学生へのHIV・AIDSに関する教育に向けての指導に繋げることを目的とする。

Ⅲ．研究方法

1）調査対象

看護系大学の学生１年生114名でそのうち有効回答が得られた107名（93.9%）、及び２年生106名のうち有効回答92名（86.8%）を対象とした。

2）調査期間

2010年６月～９月

3）調査施設

Ｔ看護大学

4）調査方法

HIV/AIDSに関する25項目の設問に対して、正しいか誤りかを選択させた。

5）調査内容

文献検討に基づきHIV・AIDSの基礎知識に関しては、HIVとAIDSの関連、「AIDS発症」、「HIV感染経路」、「HIV感染症の予防」、「HIV検査」、「HIV陽性者の福祉サービス・HIV陽性者の性交渉」などに関する20項目を抽出した。また、「HIV陽性者やAIDS患者に関する看護」については、「HIV診療における外来チームの医療マニュアル」や国際看護師協会（ICN）のAIDSに関する所信を参考に５項目を抽出した。合計25問を平易な言葉にして質問紙を作成した。

6）調査方法・手順

①パイロットテスト：２月にHIV・AIDSについて学生５名に回答を依頼し、質問の意味の分かりやすさ、答えやすさ、レイアウトに関する意見を聴取した。それをもとに質問紙について再検討・修正を行った。

②授業終了後に研究について調査の目的を学生に説明し同意を得た。その際、研究者が説明を行い、調査協力の承諾は調査の回収をもって得ることとした。調査用紙は、教室の出入口に回収箱を設け、投入してもらった。

7）分析方法

調査内容について統計ソフトを用いて分析検討した。各人の正解数から１年、２年の平均を求めｔ検定を行った。各質問に対しては正解者数（正解率）と不正解者数（不正解者率）を求めた。１年生と２年生で差があるかについては$\chi 2$検定を行った。

Ⅳ．倫理的配慮

本件研究は、東都医療大学の倫理委員会の承認を得ている。

研究協力者の自由意思の尊重、匿名性の保持を厳守することを前提とし、研究協力者が不利益を被らないように配慮した。口頭および文書で研究協力への理解と協力を求め、了解を得た。研究の趣旨について明記した依頼書を質問紙に添付し、研究参加に伴う負担、参加の拒否を含む対象者に与えられる権利について説明し、同意が得られた者を対象とした。調査用紙の回収は、回収箱を設け、調査の回収をもって協力の承諾とする。また、HIVやAIDSに関する知識を問う内容で、今後のHIVやAIDSに関する教育に向けての指導に繋げることを説明した。

Ⅴ．結　果

１年生107名、２年生92名の回答結果である。

表１　HIVに関連する学年別調査

			1年生 N=107		2年生 N=92		
	1、AIDS 発症	正解	正解数	不正解数	正解数	不正解数	
Q１	AIDS とは、HIV がＴリンパ球やマクロファージなどに感染した結果、免疫システムを破壊する病気である	正	92(86.0%)	15(14.0%)	88(95.7%)	4(4.3%)	*
Q２	いちど感染すると体から HIV をなくしてしまうことはできない	正	82(76.6%)	25(23.4%)	87(94.6%)	5(5.4%)	**
Q３	HIV に感染すると4週間以内にエイズを発症する	誤	85(79.4%)	22(20.6%)	81(88.0%)	11(12.0%)	
Q４	エイズ発生は、代表的な 23 の日和見感染の発症によって診断される	正	48(44.9%)	59(55.1%)	55(59.8%)	37(40.2%)	*
	2、HIV の感染経路						
Q５	HIV 感染は、エイズが発症した人からのみ感染する	誤	73(68.2%)	34(31.8%)	88(95.7%)	4(4.3%)	*
Q６	HIV 感染は、ヒトの粘膜や、傷ついた皮膚に触れると感染する可能性がある	正	88(82.2%)	19(17.8%)	77(83.7%)	15(16.3%)	
Q７	HIV 感染は、性行為によって感染する	正	101(94.3%)	6(5.6%)	92(100%)	0(0.0%)	*
Q８	HIV は、主に血液、精液、膣分泌液に多く含まれている	正	73(68.2%)	34(31.8%)	72(78.3%)	20(21.7%)	
Q９	HIV 感染は、注射器・注射針の使い回しによって血液を介して感染する	正	101(94.4%)	6(5.6%)	88(95.7%)	4(4.3%)	
Q10	HIV 感染は、胎内感染や出産時の産道感染、母乳による母子感染がある	正	89(81.2%)	18(16.8%)	89(96.7%)	3(33.0%)	*
Q11	HIV 感染は、蚊によって感染する	誤	54(50.5%)	53(49.5%)	73(79.3%)	19(20.7%)	*
Q12	HIV 感染は、食べ物や飲み物、食器を介して感染する	誤	88(82.2%)	19(17.8%)	88(95.7%)	4(4.3%)	*
	3、HIV の感染予防						
Q13	日本では、HIV 感染者やエイズ患者は減少している	誤	80(74.8%)	27(25.2%)	84(91.3%)	8(8.7%)	*
Q14	HIV 感染は、正しいコンドームの使用によって感染を予防できる	正	94(87.9%)	13(12.1%)	86(93.5%)	6(6.5%)	
Q15	HIV 感染の検査は、保健所や病院、クリニック等で受けることができる	正	102(95.3%)	5(4.7%)	84(91.3%)	8(8.7%)	
Q16	エイズの発症は、HIV の働きを抑える治療薬が開発され、病気の進行を抑えることができるようになっている	正	82(76.6%)	25(23.4%)	79(85.9%)	13(14.1%)	
Q17	HIV 感染は、クラミジアなどの性感染症にかかると感染しやすくなる	正	55(51.4%)	52(48.6%)	58(63.0%)	34(37.0%)	

4、HIV 検査

Q18	HIV の感染の可能性のある機会があって3月以上たってから検査を受けて「陰性」とでた場合は感染していないと考えられる	正	50(46.7%)	57(53.3%)	53(57.6%)	39(42.4%)	

5、HIV 感染者の福祉・性交渉

Q19	HIV 感染者は、その程度によって身体障害者福祉法上の身体障害者として認定され、さまざまな福祉サービスを受けられる	正	29(27.1%)	78(72.9%)	62(67.4%)	30(32.6%)	**
Q20	HIV 陽性者は、パートナーがそれを理解し、パートナーへ二次感染を予防する方法が正しくとられていれば、性交渉は可能である	正	77(72.0%)	30 (28.0%)	80(87.0%)	12(13.0%)	*

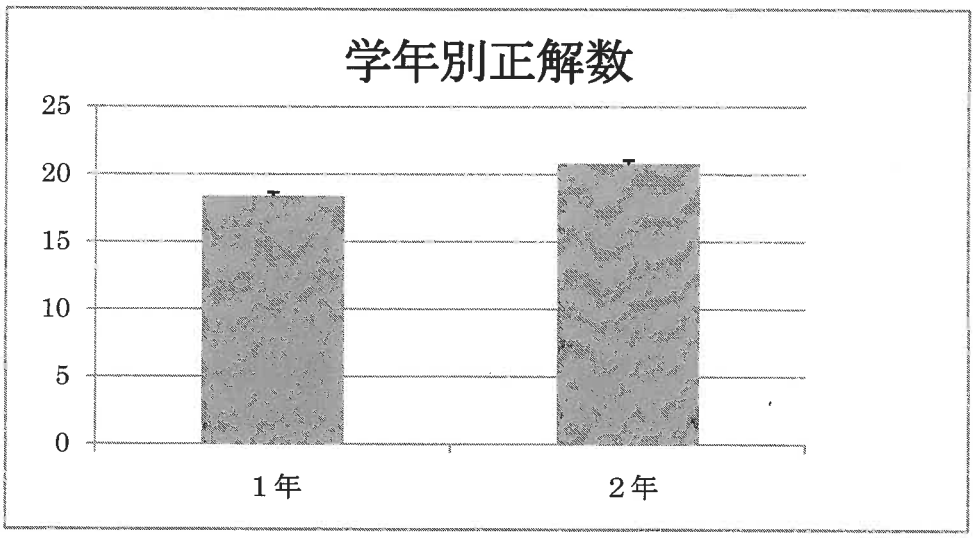
6、看護師の役割の内容

Q21	HIV とその感染経路、予防、カウンセリング、および安全な医療の実践に関する最新情報を入手できるようにする	正	95(88.8%)	12(11.2%)	81(88.0%)	11(12.0%)	
Q22	日常生活上の注意点についてプライバシーに配慮しながら説明を行う	正	93(86.9%)	14(13.1%)	82(89.1%)	10(10.9%)	
Q23	HIV感染だけでなく、B型肝炎やC型肝炎といったその他の血液媒介感染症への脅威から保護するために、保護用具などを用い安全に配慮する	正	76(71.0%)	31(29.0%)	68(73.9%)	24(26.1%)	
Q24	HIV/エイズと共生する人々への服薬支援を行う	正	47(43.9%)	60(56.1%)	48(52.2%)	44(47.8%)	
Q25	HIV陽性者やエイズ患者に対して、医師や社会福祉の専門家、カウンセラーなどを必要な専門職への橋渡しを行う	正	82(76.6%)	25(23.4%)	69(75.0%)	23(25.0%)	

＊P＜0.05　＊＊P＜0.01学年有意差

表１は、HIVとAIDSの関連、「HIV感染症の予防」、「AIDS発症診断」、「HIV感染経路」、「HIV陽性者の福祉サービス」、「HIV陽性者の性交渉」などに関する項目を抽出した質問20項目とHIV陽性者やAIDS患者に関する看護についての５項目の合計25項目の質問内容について調査した結果である。不正解は誤答と無回答を含んだ値である。１年生の各人の正解数の平均値は18.3±0.3（平均±標準誤差）で、２年生の各人の正解数の平均値は20.8±0.3であった。1年生よりも２年生の正解率が高かった（P＜0.01，図―1）。

図１



（表―１）では、「AIDSの発症」「HIV感染経路」、「HIV感染症の予防」、「HIV陽性者の福祉サービス・HIV陽性者の性交渉」などに関する15項目の各質問に対しての回答は１年生と２年生で正解率に有意差が認められた（P＜0.05）。一方、「HIV検査」、HIV陽性者やAIDS患者に関する「看護師の役割」については有意差がなかった。

１．「AIDS発症」について

表1－1は、AIDS発症の診断に関連する４項目についての回答結果である。３項目で、１年生よりも２年生が、正解率が高く有意差があった（P＜0.05）。Q１の質問「AIDSとは、HIVがTリンパ球やマクロファージなどに感染した結果、免疫システムを破壊する病気(正)」、Q２の質問「いちど感染すると体からHIVをなくしてしまうことはできない（正)」や、Q４の「エイズ発生は、代表的な23の日和見感染の発症によって診断される(正)」で、２年生の方が正解率が高かった。また、Q３の「HIVに感染すると４週間以内にエイズを発症する（誤)」は、有意差がなかったが、２年生の方が１年生より正解率が高い傾向がみられた。Q１、２、３が80％以上正解であったが、Q４では半数程度不正解であった。

２．「HIV感染経路」について

表１－2は、HIVの感染経路に関連する８項目についての回答結果である。Q10「胎内感染や出産時の産道感染、母乳による母子感染がある（正)」で、１年生よりも２年生が、正解率が高かった(P＜0.05)。Q11の「蚊によって感染する（誤)」、Q12の「食べ物や飲み物、食器を介して感染する(誤)」、Q７の「性行為によって感染する（正)」でも２年生の方が正解率が高かった（P＜0.05)。Q５の「HIV感染は、エイズが発症した人からのみ感染する（正)」でも１年生よりも２年生の正解率が高かった。また、有意差がない、Q８の「HIVは、主に血液、精液に多く含まれている(正)」では、１年生73名（68.2％）と２年生72名（78.3％）であった。Q９の「注射器・注射針の使い回しによって血液を介して感染する（正)」は、１年生101名（94.3％）と２年生88名（95.6％）ともに正解率が高かった。さらに、Q６の「ヒトの粘膜や、傷ついた皮膚に触れると感染する可能性がある（正)」も１年生88名（82.2％）と２年生77名(83.69％）ともに正解率が高かった。

３．「HIV感染症の予防」について

表１－３は、HIV感染症の予防に関する５項目についての回答結果である。Q13の「日本では、HIV感染者やエイズ患者は減少している（誤)」で、有意差があった（P＜0.05)。その他の項目では、Q15の「HIVの検査は、保健所や病院、クリニックなどで受けることができる（正)」では、１年生の正解102名（95.3％）で２年生の正解84名(91.3％）で両者とも９割を超える正解率であり

有意差は認められなかった。

また、Q14の「HIV感染は、正しいコンドームによって感染を予防できる（正）」では、１年生94名（87.8%）、２年生86名（93.4%）の正解率だった。Q17の「HIV感染は、クラミジアなどの性感染症にかかると感染しやすくなる（正）」では、１年生が55名(51.4%)、２年生58（63.0%）の正解率だった。Q16の「エイズの発症は、HIVの働きを抑える治療薬が開始され、病気の進行を抑えることができるようになっている(正)」では、１年生82名（76.6%）で、２年生は79名（58.9%）の正解率だったが、有意差は認められなかった。

４.「HIV検査」について

表1－4は、HIV検査に関連する項目についての回答結果である。Q18の「HIVの感染の可能性のある機会があってから検査を受けて「陰性」とでた場合は感染していないと考えられる（正）」では、１年生の正解50名（46.7%）、２年生の正解53名(57.6%）であり、両者とも正解率が6割に満たなかった。１年生と２年生の正解率には、有意差は認められなかった。

５.「HIV陽性者の福祉サービス・HIV陽性者の性交渉」について

表1－5は、HIV陽性者の福祉サービス・HIV陽性者の性交渉関連する２項目についての回答結果である。Q19の「HIV感染者は、その程度によって身体障害者福祉法上の身体障害者として認定され、さまざまな福祉サービスを受けられる」で、１年生の正解は、29名（27.1%）であり、２年生の正解は、62名（67.4.0%）で有意差があった（P<0.05)。また、Q20の「HIV感染者は、パートナーがそれを理解し、パートナーへ二次感染を予防する方法が正しくとられていれば、性交渉は可能である」については、１年生の正解率77名（72.0%）であり、２年生の正解は80名（87.0%）で有意差があった（P<0.05)。

６.「看護師の役割」について

表１―６は、看護師の役割に関連する５項目についての回答結果である。Q22の「日常生活の注意点についてプライバシーに配慮しながら説明を行う（正)」では、１年が93名（86.9%）と２年生が82名（89.1%）で両者とも８割を超えた正解率だった。また、Q23の「HIV感染だけでなく、B型肝炎やC型肝炎といったその他の血液媒介感染症への脅威から保護するために、保護用具などを用い安全に配慮する（正)」では、１年生が76名(71.0%)と２年生が68名(73.9%)の正解率だった。Q24の「HIV/エイズと共生する人々への服薬支援を行う（正)」では、１年生の正解率47名（43.9%）で、２年生の正解率48名（52.2%）と５割の正解率で低い傾向だった。また、Q25の「HIV陽性者に対して、医師や社会福祉の専門家、カウンセラーなどを必要な専門職への橋渡しを行う(正)」では、１年生、２年生とも７割以上の正解率だったが、１年生が２年生よりも若干数多かった。Q21の「HIVとその感染経路、予防、カウンセリング、および安全な医療の実際に関する最新情報を入手できるようにする(正)」では、１年生、２年生の両者とも８割以上の正解率だった。いずれも有意差は認められなかった。

Ⅵ. 考　察

１.「AIDSの発症」について

Q１の「AIDSとは、HIVがTリンパ球やマクロファージなどに感染した結果、免疫システムを破壊する病気」、Q２の「いちど感染すると体からHIVをなくしてしまうことはできない」や、Q４の「エイズ発生は、代表的な23の日和見感染の発症によって診断される」では、１年生よりも２年生の正解率が高く、学年が進むにつて専門的な知識が養われていると考えられる。また、Q４「エイズ発生は、代表な23の日和見感染の発症によって診断される」では、「代表的な23の日和見感染の発症によって診断される」にといった設問の内容が、難しかったこと及び問題文の意味が分かりにくかったため学生が迷い、解答率が低かったのではないかと考える。

２.「HIV感染経路」について

７項目の質問のうちQ７の「性行為によって感染する」やQ８の「HIVは、主に血液、精液に多く

含まれている」及び、Q10の「胎内感染や出産時の産道感染、母乳による母子感染がある」、またQ11の「 蚊によって感染する」、Q12の「 食べ物や飲み物、食器を介して感染する」などで、１年生よりも２年生の正解率が高かった。Q７、Q10、Q12の内容は、リプロダクティブヘルスを専門とする教科に対応する。このことは、２年生の学生が母子看護学総論の講座を終了することで知識が培わり、１年生よりも２年生の正解率が高いと考えられる。一方、Q９の「注射器・注射針の使い回しによって血液を介して感染する(正)」、Q6の「ヒトの粘膜や傷ついた皮膚に触れると感染する可能性がある」、Q８の「「HIVは、主に血液、精液に多く含まれている」ともに１年生と２年生ともに高い正解率だったが、不正解者が若干名いる。看護師としてHIVの感染経路の知識は重要で、本来間違ってはいけない内容である。看護大学生の知識を広めることが　課題であると考える。また、今後、看護者として医療器具の取扱いなどの知識を強化することも必要であることが示唆された。

３．「HIV感染症の予防」について

Q17の「HIV感染は、クラミジアなどの性感染症にかかると感染しやすくなる」で１年生55名(51.4%)、２年生58名（63.9%）と正解率が低かった。岡ら[3]によればHIV感染症とその他の性感染症も増加していることからHIVの感染と他の性感染症とは深く関連していることが報告されている。また、予防については、中・高校で授業の一環として行われている。本調査の結果からHIV感染症を予防する為に、その他の性感染症の知識を踏まえた教育強化の構築が重要だと考える。Q16の「エイズの発症は、HIVの働きを抑える治療薬が開始され、病気の進行を抑えることができるようになった」では、１年生82名（76.6%）で、２年生は79名（58.9%）の正解率だった。今後ますます治療薬について、Q24と併せて看護師の役割として知識や態度を教授できるように授業の構築が必要であると考える。

４．「HIV検査」について

１年生と２年生の両者とも正解率が６割を超えなかった。このことは、１年生、２年生ともに知識を強化する教育が必須だと考える。また、HIVの検査は１次予防、２次予防に繋がり、早期発見で重症化を予防できることを１年生や２年生にも理解できるような教育を検討していきたいと考える。

５．「HIV陽性者の福祉サービス・HIV陽性者の性交渉」について

HIV陽性者の福祉サービス・HIV陽性者の性交渉関連する２項目についての回答結果については、Q19の「 HIV感染者は、その程度によって身体障害者福祉法上の身体障害者として認定され、さまざまな福祉サービスを受けられる」や、Q20の「HIV感染者は、パートナーがそれを理解し、パートナーへ二次感染を予防する方法が正しくとられていれば、性交渉は可能である」については、２年生の正解率が高かった。このことは２年生が１年生よりも専門的知識が養われたと考えられる。しかし、Q19の「HIV感染者は、その程度によって身体障害者福祉法上の身体障害者として認定され、さまざまな福祉サービスを受けられる」では、１年生の不正解が78名（72.9%）２年生の不正解が30名（32.6%）であった。この結果から社会的側面からの支援について理解できるような教育を今後検討する必要がある。また、HIV感染者の多くは、30歳代を中心に若い世代が大半を占めており、HIV感染症が治療によりコントロールできている人達は、仕事に復帰することにより社会参加を果たす現状からも、社会的側面からの支援は重要であると考える。

６．「看護師の役割」について

Q22の「日常生活の注意点についてプライバシーに配慮しながら説明を行う」や、Q23の「HIV感染だけではく、Ｂ型肝炎やＣ型肝炎といったその他の血液媒介感染症への脅威から保護するために、保護用具などを用い安全に配慮する」及び、他のQ21、Q24、Q25も有意差が認められなかった。Q24の「HIV/エイズと共生する人々への服薬支援を行う」では、１年生、２年生とも正解率が低かった。両者とも服薬支援の役割認識は低かった。これ

は、今後、看護師の役割として重要であり、HIVやAIDSと共生する人々への服薬支援があることを教育していく必要がある。また、HIVの感染予防のQ16でもHIV感染者の治療方法として、服薬の支援も同様に看護師として必要である。治療は多剤併用療法で長期の服薬継続により治療効果があることを学生が知識として理解しなければならない。そこで、服薬支援が看護師の役割として強化できる教育を検討する必要があると考える。

また、Q23の質問は、リプロダクティブヘルスで、性感染症の授業を受講した２年生が、１年生よりも高い正解率だった。この結果から２年生が１年生よりも専門知識が養われていることが考えられる。

Q４、Q17、Q18、Q24に対して、１年生、２年生ともに正解率が５割程度であり、他領域と連携をとり、学習を強化する必要があると考える。Q16、Q19、Q25では、社会支援についてで、Q25の「HIV陽性者やエイズ患者に対して、医師や社会福祉の専門家、カウンセラーなどを必要な専門職への橋渡しを行う」では、１年生の不正解25名（23.4%）、２年生23名（25.0%）であった。Q19は、１年生、２年生の正解率が低いことから看護師の役割として医療の連携は不可欠であり、プライバシーの保持と情報の共有をできるような体制づくりを看護師の役割として欠かせない。この場合、プライバシーの保持を優先するあまり、孤立してしまわない関わりについても検討した内容の授業の展開を視野に含め、専門職への橋渡しができるような看護師の役割を構築したいと考える。池田ら[1]は、多くの人は就労や学業など社会生活と治療の両立を実践することが患者の目標になり、両立は容易ではないことからいろいろな職種と連携し合ってチームで体制を整えて、社会支援の重要性を指摘している。その為に社会支援のありかについて自立を促しつつ患者さんのセルフマネジメントが必要不可欠だと考える。患者さんの生活の変化にあわせた修正や追加が適宜サポートのできるような看護師育成に目を向けた授業を構築することが求められる。

Ⅶ. 結　論

今回の調査結果は、以下の４項目の内容にまとめられる。

1．AIDS発症、HIV感染経路については、１年生よりも２年生の正解率が高かった。このことは、２年生の学生が母性看護学総論、リプロダクティブヘルスを専門とする教科により知識が培わり、授業が有効に働いていることを示していると考えられる。

2．基礎知識など１年生と２年生ともに高い正解率の場合にも、不正解者が若干名いた。看護師としてHIVの感染経路は知識として重要であり、本来間違ってはいけない内容である。今後、看護大学生の知識を広め、看護教育で間違いを正し、看護と結びつけた知識や態度を教育していくことが重要である。また、看護者として医療器具の取扱いなどの知識も強化することが必要であると考えられる。

3．看護師の役割の専門的な内容になると１年生と２年生との両者で正解率に差がなかった。今後、看護の役割を教育の強化が必要性ある。

4．今後、学生がより正確な知識を修得できるように、国家試験にも視野を広げ、リプロダクティブヘルスの内容を構築できる授業を展開したいと考える。また、患者さんの自立をうながすセルフマネジメントができるように、看護と結びつけて知識や態度を教育していくことが大切である。

今後も授業の在り方や調査検討を繰り返しながら患者さんの各年齢のライフイベントに応じた看護が提供できるように努力していきたい。

文　献

1）池田和子．HIV/AIDS患者の療養行動支援～看護師の立場から～．日本慢性看護学学会誌．3(2)，35―37，2009.

2）厚生労働省エイズ動向委員会．平成15年エイズ発生動向．2004.

3）岡慎一．HIV　Q＆A　医薬ジャーナル社．2008.

4）厚生労働省エイズ動向委員会．平成22年エイズ発生動向．2010.

5）忠津佐和代．大学生の性感染症予防行動および避妊行動に対する意識・態度の実態調査．川崎医療福祉学会．19(1)，93―103，2009.
6）高田恵子．高校生に対する性感染症予防教育講座前後における性意識の変化．埼玉県立大学保健医療福祉学部看護学科．11，41―47，2009.
7）加藤千恵子．高校３年生の性に関する知識と意識．名寄市立学保健福祉学部看護学科．母性看護学．39，81―83，2008.
8）加藤千恵子．高校１年生の性知識と性意識の変化から見る．名寄市立学保健福祉学部看護学科．母性看護学．40,135―137，2009.
9）木村眞知子．HIV ／AIDS看護実践における倫理的課題．先端倫理研究．(4)，2009.